

生産と流通からみた伊都国と奴国

平尾 和久(伊都国歴史博物館)

I はじめに

糸島地域と春日丘陵を含めた福岡平野はそれぞれ『魏志』倭人伝に記された伊都国と奴国の故地といわれる。両地域ともに前漢鏡を30面前後副葬する厚葬墓が認められ、各地域を統括した王の墓とされる。また、近年、発掘調査の進展とともに手工業生産の様相も明らかになりつつある。そこで、本稿では両地域の生産と流通の変遷をたどることからはじめ、共通点と相違点を明らかにし、北部九州における生産と流通の特徴を抽出することを目的とする。

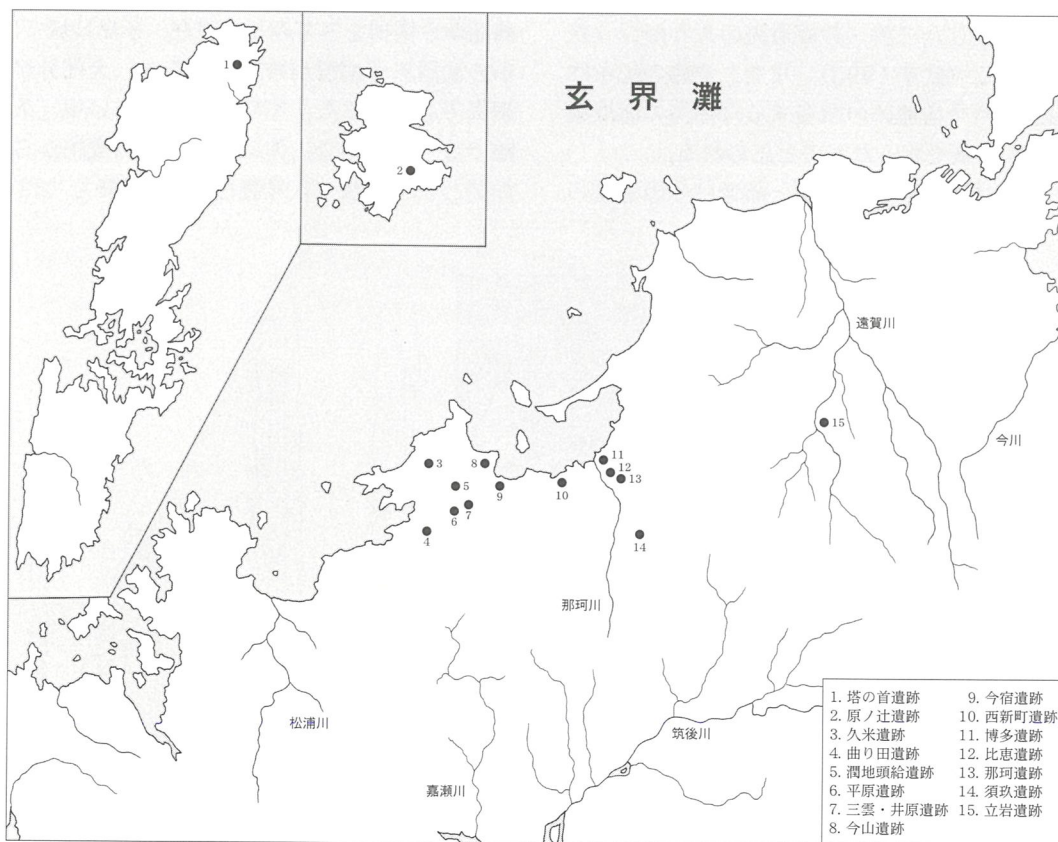
II 生産・流通の時期的変遷

1. 糸島地域

糸島地域で行われる生産活動は大きく5段階に分かれる。その変遷は前稿で簡単に述べたが(平尾2005)、本稿では少し詳しく振り返る。

第1段階～自家消費的生産活動(弥生時代早～前期)

弥生時代は朝鮮半島から稲作農耕文化を受容し始まるが、それに伴い支石墓に代表される墓制も同様に受容される。糸島地域では井田用会支石墓(柳田1983)、三雲石ヶ崎支石墓(原田1952)や長野宮ノ前遺跡(岡部編1989)のように碧玉製管玉や柳葉形磨製石鏃を副葬するものがあり、上石も大きいものが多い。これら副葬品の大部分は搬入品と思われるが、曲り田遺跡の柳葉形磨製石鏃未製品の存在から、当地域での生産も併行していたと推測される(橋口編1984・1986)。また、系譜関係は不明ながらも、大坪遺跡13号甕棺墓の蓋に扉材が転用された事例から、掘立柱建物も弥生時代前期から存在したことが明らかとなった(橋口編1995)。このような建築材や木製品の加工は基本的に消費地の近くで行ったと想定される



第1図 関連遺跡分布図

が、現在のところ当地域で木製品の貯蔵等が認められるのは弥生時代中期後半～後期前半の上罐子遺跡のみである。

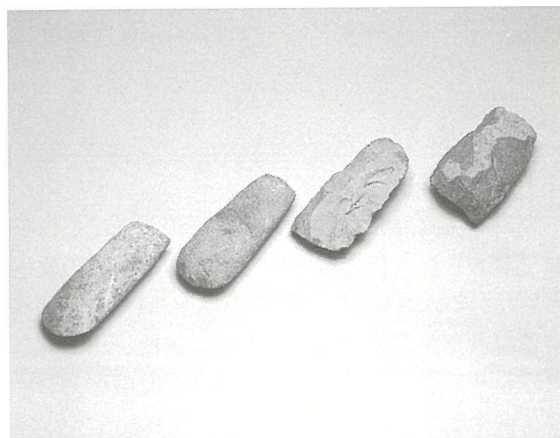
このように第1段階は自家消費的な生産が中心である。

第2段階～石斧の生産と配布（弥生時代前期末～中期前半）

糸島半島の東部に所在する今山遺跡は標高80mを測る全体が玄武岩でできた山である。今山遺跡では弥生時代前期初頭から太型蛤刃石斧の生産が始められ、前期末～中期前半にかけて生産量が飛躍的に増加する。太型蛤刃石斧は大陸系磨製石器の一種で、長さ20cm、幅7～8cm、厚さ4～5cm、重さ約1.5kgを測る玄武岩製の重厚な石斧である（第2図）。主に、伐採用の斧として使用され、今山遺跡では原石採取から粗割・打裂・敲打（・研磨）まで一貫した工程が追える。このことから専門工人による石斧生産が想定され、その分布範囲は北部九州全域に広がる。

このように今山遺跡で生産された石斧は広域に分布する一大ブランド品であったが、石斧の生産や流通の管理は工人自らではなく、のちの伊都国の首長が存在した三雲・井原遺跡の人々が行ったと考えられる（武末1993）。また、実際の配布には今山遺跡や今宿遺跡の所在する今津湾の海浜集落の人々が一翼を担ったものと思われる。

このように第2段階の生産と流通は今山遺跡の

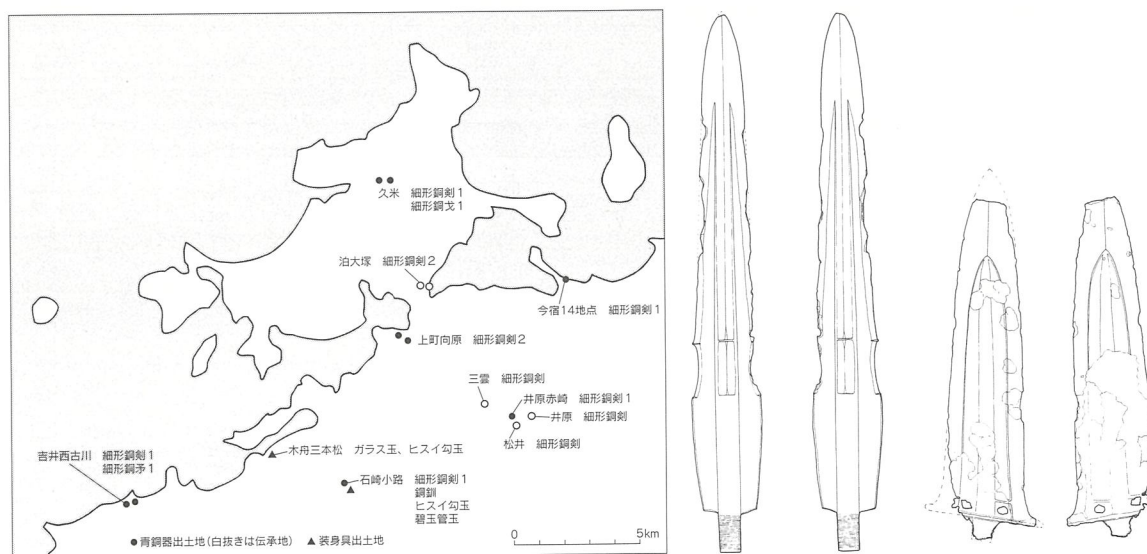


第2図 太型蛤刃石斧製作工程（今山遺跡）

石斧生産に代表されるように、石材産出地の付近で、森林伐採や木材加工のための生活必需品を一貫生産し、製品の流通を集中管理することが特徴である。また、今山遺跡のような集中的な石器生産は立岩遺跡や高槻遺跡でもみられる。

第3段階～銅鏡の輸入と配布（弥生時代中期後半）

弥生時代前期末から中期前半は武器形青銅器の流入・生産が始まる。しかし、糸島地域では鋳型などの青銅器の生産を示す遺物は認められず、副葬品から様相をみている。現在、糸島地域では14本の武器形青銅器が確認されるが、大部分が細形銅剣である。また、不時発見例が多い中、久米遺跡では、発掘調査に伴い中期初頭の甕棺から細形銅剣と管玉6個（6号甕棺）・細形銅戈（23号甕



第3図 弥生時代中期前半の副葬品を持つ墳墓の分布と細形銅剣・銅戈（久米遺跡）

棺)が出土した(第3図)(河合編1999)。現在は吉武高木遺跡3号木棺墓のように集中して武器形青銅器を副葬する墳墓は未確認だが、三雲・井原遺跡で不時発見ながらも4本の細形銅剣が確認されており、そのような墳墓の存在も想定される。

中期後半になると、突出した内容の副葬品を持つ厚葬墓が出現する。三雲南小路遺跡では周囲を幅4m前後の周溝に囲まれた32m×31mの墳丘の中に、2つの大型甕棺が納められていた。1号甕棺は江戸時代に発見され、『柳園古器略考』に詳細が記される。その後、1975年の発掘調査で全容が明らかになり、2号甕棺も確認された(柳田編1985)。1号甕棺からは漢鏡Ⅱ期の大型鏡と漢鏡Ⅲ期の連弧文銘帯鏡を中心とする中型鏡あわせて35面出土した。他にも金銅四葉座飾金具8個・ガラス璧8面などの中国製の品々が認められる。また、ほかに棺内から細形銅矛1本・中細形銅矛1本・ガラス製の勾玉・管玉が出土し、棺外から有柄中細形銅剣1本と中細形銅戈1本、朱入小壺1個が出土した。2号甕棺からは漢鏡Ⅲ期の小型鏡22面を中心に翡翠勾玉1個・ガラス璧転用垂飾1個・ガラス勾玉12個が出土した。

その後の前原市教育委員会の調査では周溝から石杵と朱を入れた鉢が出土し、江戸時代に発見された朱入小壺との関連性が注目される(岡部・牟田編2002)。

このように三雲南小路遺跡1号・2号甕棺は、大型の甕棺に銅鏡を中心とした豊富な副葬品を納め、周溝をもつ墳丘に葬られることから、糸島地域を治めた伊都国の首長墓＝王墓といえる。

副葬品は①原材料採取から製品加工まで中国で行われたもの(前漢鏡・ガラス璧・金銅四葉座飾金具…中国製威信財)②原材料は輸入し、製品加工を北部九州で行ったもの(ガラス製勾玉・管玉・武器形青銅器…日本製威信財)の二種類に分けられる。特に①の中国製威信財は須玖岡本遺跡D地点甕棺のように地域を治めた奴国の首長の墳墓にみられるなど限定された階層に配布された品々である。しかし、糸島地域では今山遺跡の石斧生産以降、佐賀平野で確認される青銅器の鋳型など生産工房につながる遺物は確認されず、生産力の向上や威信財の生産の結果、中国製威信財を大量に入手できたとは考えられない。逆に弥生時代前期末から中期前半の石斧生産・流通を三雲・井原遺跡の首長が管理する過程で、北部九州全域に糸島地域を中心とする物流のネットワークを形成し、それを紀元前108年に朝鮮半島西北部に設置された楽浪郡にまで延ばした結果であると考えられる。

また、副葬品の構成の差から三雲南小路遺跡の1号甕棺を王墓、2号甕棺を王妃の墓とする意見もあるが、仮にそうであるならば、このころ夫婦合葬墓が出現した楽浪の墓制の影響を受けたともいえる。

このように第3段階の生産活動は明らかではないが、前代に築いた物流のネットワークを拡大したことで、楽浪郡を介して前漢王朝に朝貢するにまで至り、銅鏡をはじめとする中国製威信財を独占的に入手し、限定された首長に配布した時期といえる。



第4図 平原1号墓全体図と墓境内副葬品配置図



第5図 潤地頭給遺跡出土碧玉・水晶玉未製品

第4段階～青銅器の生産（弥生時代後期）

糸島地域では弥生時代後期から武器形青銅器の生産が確認される。三雲・井原遺跡では出土状況が不明だが、広形銅矛鋳型片2個・完形の広形銅戈鋳型1個が確認され、青銅器生産の中心と思われる。また、曲り田遺跡からは発掘調査に伴い、広形銅矛の鋳型が出土したが（橋口1994）、包含層からの出土で時期の特定は難しく、糸島地域での青銅器生産の様相は明らかではない。

しかし、中期後半に出現した王墓は後期に入っても引き続き築かれる。井原鍵溝遺跡は江戸時代に発見され、出土品・所在地ともに不明だが、出土遺物の図が残され、壺から漢鏡Ⅳ期の銅鏡21面・刀剣・巴形銅器3個・鎧の板のごときものが出土したことが記される。

その後、三雲・井原遺跡の西にある曾根丘陵には平原1号墓が築かれる。平原1号墓は14.0m×10.5mの長方形プランの墳丘墓で周囲に幅約2mの溝をめぐるが、東南隅が一部途切れ、墓への出入口となる。主体部は墳丘の東北寄りに設けられ、4.6m×3.5mの墓壇に長さ3mの割竹形木棺を納める（第4図）。副葬品は墓壇の四隅と棺内から多量に出土し、直径46.5cmを測る超大型の仿製内行花文鏡5面を代表とする計40面の銅鏡を中心に多数のガラス玉類・瑪瑙管玉12個・耳環2個・素環頭大刀1本からなる。これら副葬品の大半は中国や朝鮮半島からの舶載品で、前代から引き続き、中国製威信財を入手していたと考えられる。また、当時は舶載鏡を権威の象徴としていたが、平原1号墓例のような超大型の銅鏡は、祭祀具として大型化した武器形青銅器とは異なり、

威信財として扱われ、舶載鏡をもとに倭人独自の威信財を創出したものといえる。

このように第4段階は北部九州で祭祀に用いられた広形銅矛などの武器形青銅器の生産を始めるとともに、引き続き舶載鏡などの中国製威信財を入手していた。また、新たな倭人独自の威信財を創出した時期といえる。

第5段階～玉類と塩の生産と流通（弥生時代終末～古墳時代初頭）

弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて糸島地域の生産活動の様相は従来、不明確であったが、潤地頭給遺跡の玉作り工房の調査により、その一端が明らかにされた（江野編2005）。概報によると潤地頭給遺跡は糸島半島中央部の標高3～4mの微丘陵地に所在する。当時は東から今津湾、西から加布里湾が大きく湾入しており、海岸線に程近い場所に遺跡が形成されている。三雲・井原遺跡からは北に約4kmのところに所在し、まさに糸島半島のクビレに位置する。

工房群は両側を深い谷に挟まれた微高地上の東西80m、南北130mの範囲で確認された。工房は竪穴住居の形態をとり、平面は長方形もしくは歪んだ長方形を呈する。屋外には工房を囲むように円形の排水溝が掘られ、それが谷に注ぎ込む。谷の近くには井戸を設ける。工房や廃棄土坑からは砥石や叩き石・鉄錐などの工具が出土している。工房群からは碧玉・水晶・蛇紋岩・瑪瑙・鉄石英の破片が出土するが、碧玉と水晶が多く見られる（第5図）。また、未製品から碧玉は管玉、水晶は丸玉・小玉・算盤玉、蛇紋岩からは勾玉を作り出している。石材の産出地については、碧玉が山陰

地方からの搬入の可能性が高い。また、水晶は産地同定が難しく、糸島地域でも産出する場所があるため資料調査が必要である。

潤地頭給遺跡の玉作りの特徴として、剥片が山陰地方などの碧玉原産地付近の玉作り遺跡と比べて著しく少ないことが挙げられるが、これらは、搬入する原石を選択する段階で、不必要な質の悪い箇所を除去した結果と思われる。今後は、潤地頭給遺跡で生産された玉類がどこに搬出されたのか、朝鮮半島も視野に入れつつ検討する必要がある。

また、古墳時代初頭には備讃瀬戸内地域の影響を受け、脚台付製塩土器を用いた塩の生産が始まる（山崎 1994）。製塩土器は博多湾沿岸・周防灘北岸・大分平野とその内陸部から確認されるが、大部分は 1 遺構から 1 ～数点のみの出土である。一方、実際に塩を生産した根拠となる製塩土器の大量出土は、博多湾の西の今津湾岸に位置する今宿遺跡（久住・池田編 2000）と今山遺跡（米倉編 2005）のみ確認されており、両者は北部九州最大規模の土器製塩遺跡といえる（第 6 図）（平尾 2004）。

第 5 段階は潤地頭給遺跡でみられるように、大規模な玉作り工房群を形成し、玉作りの技術が山陰地方のものに類似することから、山陰の工人とともに不必要箇所を除去した碧玉原石を搬入し、玉類を生産したことが考えられる。製品の供給先は現在不明であるが、弥生時代中期以降、形成されたネットワークが活かされたことは容易に想定できる。また、古墳時代に入ると、今津湾沿岸で

土器製塩を開始し、博多湾沿岸地域に供給された。このように弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて生活必需品である塩の生産を行いながら、地元から産出しない原材料を用いた玉類の生産を一時期併行している。

2. 福岡平野と春日丘陵

第 1 段階～自家消費的生産（弥生時代前期～中期前半）

板付遺跡や那珂遺跡などの初期農耕集落の水田は朝鮮半島で完成していた灌漑システムを導入した結果、既に大規模な灌漑施設を伴ったと指摘されている（広瀬 1997）。特に板付遺跡では整った水路や井関・畦畔の存在が明らかとなり、その前段階の那珂遺跡などでは環濠集落も出現する（第 7 図）。

弥生時代前期中頃～後半に該当する比恵遺跡 20 次調査 12 号貯蔵穴からは藻塩焼製塩の痕跡が確認され（菅波編 1992）、中期前半の姪浜遺跡 3 次調査 98 号土坑からは、強い二次焼成を受け、器壁の表面が薄く剥離した甕が出土した（長家編 1996）。この甕は海水を煮詰める煎熬段階で用いられ朝鮮系無文土器も伴うことから、初期の土器製塩と朝鮮半島は何らかのつながりがあった可能性がある。このような中期前半段階の土器製塩は日常土器を転用して海水を煮詰め、製塩の規模も小さいことから自家消費的なものと判断される（平尾 2004）。

第 1 段階は弥生時代の始まりとともに環濠集落が出現し、完成された灌漑システムを用いて水田



第 6 図 製塩土器出土状況（今山 8 次）と製塩土器実測図（今宿 5 次）

が営まれた。また、日常土器を用いた土器製塩も始まるが、規模も小さく自家消費的生産が中心の時期といえる。しかし、弥生時代前期末～中期前半にかけて、福岡平野や佐賀平野では朝鮮系無文土器が多く認められ、朝鮮半島南部地域との交流が想定される（後藤 1987・片岡 1996）。甕棺墓への武器形青銅器の副葬も交流を通して伝わり、吉武高木遺跡 3 号木棺墓や板付田端遺跡のように多鈕細文鏡や複数の武器形青銅器を持つ墳墓も出現する。

第2段階～青銅器生産の始まり（弥生時代中期前半～後半）

朝鮮半島との交流により、弥生時代前期末から武器形青銅器の副葬をはじめた北部九州の人々は、すぐに青銅器の生産に着手する。当初、青銅器の鑄型は朝鮮半島と同じ滑石片岩や滑石岩が用いられたが、後に石英・長石斑岩が大部分を占めることから、青銅器生産の開始期は朝鮮半島からの渡来人の下で行われたが、すぐに倭人自らが生産に着手したようだ。これは弥生時代中期前半から、朝鮮半島に例がない三条の節帯をもつ銅矛を生産するなど、倭人の好みに合った青銅器が生産され

たことからわかる。石製鑄型は砥石などに転用される例が多いが、土製中子や埴埴・取瓶・送風管・銅滓などはほとんど転用されないため、青銅器生産工房の存在を示す貴重な資料といえる。石製鑄型や土製中子が出土するのは大きく佐賀平野と福岡平野の 2 つにまとまる。ここでは福岡平野、とくに春日丘陵で行われた青銅器生産にふれる（第 8 図）。

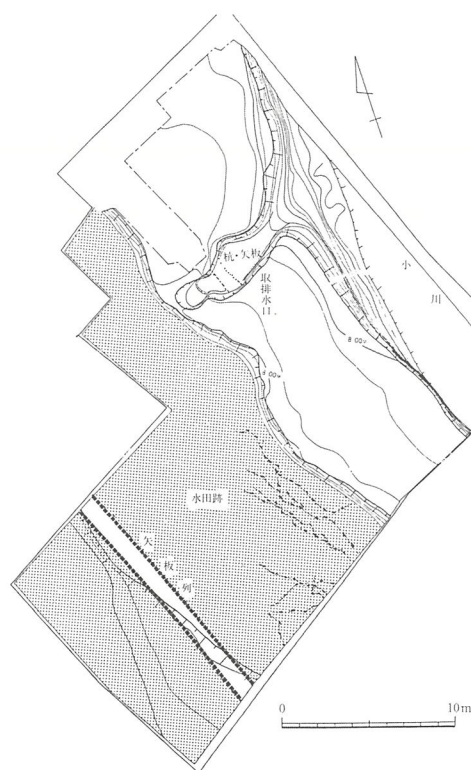
春日丘陵の青銅器生産は、須玖タカウタ遺跡や須玖坂本遺跡 B 地点出土の銅矛中子や銅矛鑄型から中期前半より始まると思われるが、青銅器工房と認定できる最も古いものは中期後半の須玖盤石遺跡である（平田編 2001）。須玖盤石遺跡は春日丘陵の先端部に位置する（第 10 図）。弥生時代中期末の 4 号住居跡は小型の方形竪穴住居跡で、壁際には側溝が巡り、屋外へと延びる。また、西壁付近の床面からは炭化物が出土し、遺物は石製鑄型 2 個・銅矛中子 3 個・鑄型石材片 3 個など鑄造関係資料が出土したことから、生産工房と考えられる（平田 2004）。

また、この時期から鉄器生産工房も丘陵の西北部から中央部に形成される。中期後半から末の赤井手遺跡 33 号住居跡には鍛冶炉が伴い、多くの鉄片の存在から鍛冶工房と判断される（丸山編 1980）。中期末の仁王手遺跡 1 号住居跡からも炉が確認され、鉄片や棒状鉄製品が出土しており、赤井手遺跡と同じように鍛冶工房といえる（境編 2004）。

しかし、この時期の鍛冶工房では、鉄製鑿以外には石製工具を用い、加工方法も鑿を用いた成形と砥石を用いた研磨のみで、朝鮮半島の高度な鍛冶技術とは異なる初期的な技術段階に留まる（長家 2002）。

また、弥生中期後半には須玖岡本遺跡 D 地点で甕棺墓が発見された。標石をもつ甕棺墓で、棺内から銅鏡 30 面以内・銅矛 5 本・中細形銅戈 1 本・銅剣 2 本以上・ガラス璧片 2 個・ガラス勾玉 1 個・ガラス管玉 12 個が出土した。銅鏡 30 面のうち草葉文鏡の 3 面は漢鏡 II 期の大型鏡、他は星雲文鏡や連弧文鏡を主体とする漢鏡 III 期に含まれる中型鏡・小型鏡である。この甕棺墓は三雲南小路遺跡と同じように多量の銅鏡やガラス璧を含む副葬品を持つことから、この地域を治めた王の墓といえる。

このように第 2 段階は福岡平野の春日丘陵北部



第 7 図 板付遺跡水田址実測図

で青銅器生産が始まる。以後、後期にかけて青銅器・鉄器・ガラス製品を大量に生産するが、原材料の入手経路は不明である。また、青銅器生産の拡大は須玖岡本遺跡D地点の王墓の出現する時期に近く、大陸と交渉を行い、原材料を入手したという指摘もある（平田 2004）。

第3段階～青銅器・鉄器・ガラス生産の展開（弥生時代後期）

弥生時代後期も前段階から引き続き青銅器の生産が盛んに行われる。須玖永田遺跡や須玖岡本遺跡坂本地区では春日丘陵の北側低地（標高 16～19m）に工房を移し、周溝に囲まれた掘立柱建物で青銅器を生産する（第 10 図）（丸山編 1987・春日市教育委員会編 1994）。両遺跡からは鋳型や小銅鐸等の中子・坩堝や取瓶・送風管・銅片・銅滓など青銅器生産関連遺物が大量に出土し、中期以上に生産の規模を拡大した。

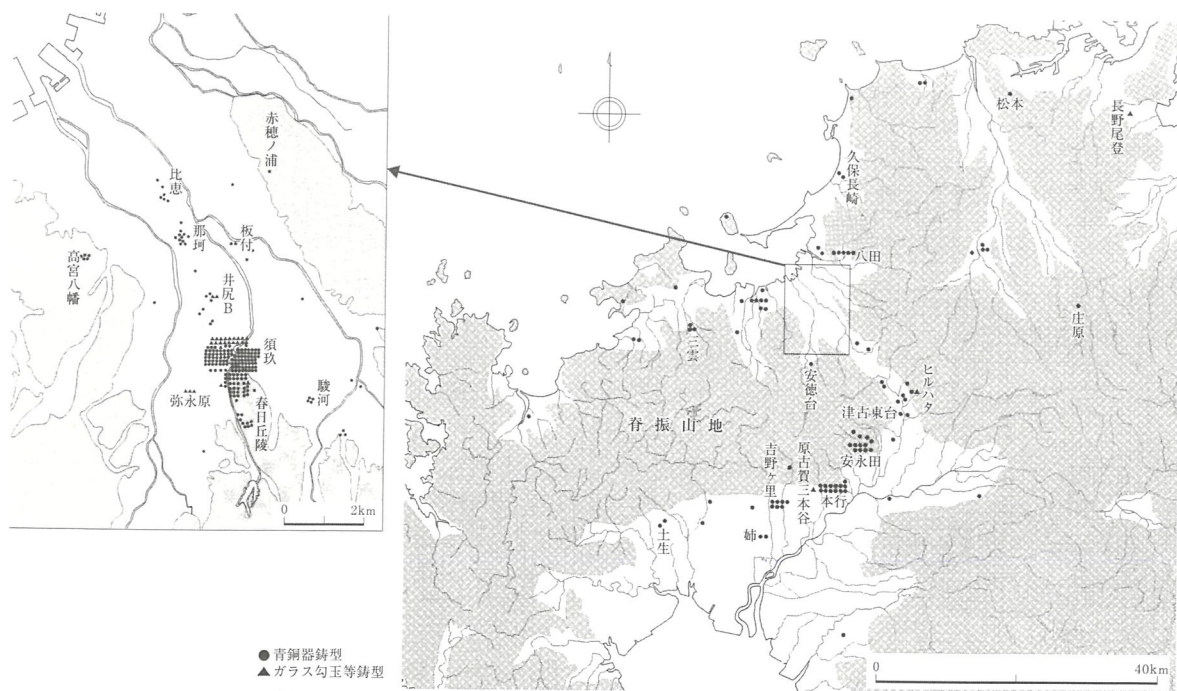
また、後期になると、ガラス製品の生産も開始する。なかでもガラス勾玉は鋳型を用いることから、生産の様子を知ることができる。ガラス勾玉鋳型は長野尾登遺跡とヒルハタ遺跡・原古賀三本谷遺跡・西新町遺跡例を除くとすべて春日丘陵とその周辺で確認される。特に須玖五反田遺跡 1 次調査 1 号住居跡からは勾玉鋳型・丸玉鋳型・ガラスが付着した容器片・ガラス片・砥石などが出土し工房跡

と考えられる（第 9 図）（吉田編 1994）。しかも遺跡の立地が春日丘陵の北側低地で、青銅器工房を持つ須玖永田遺跡や須玖岡本遺跡坂本地区などに隣接し、工房自身も屋外土坑へと延びる溝を付設する点など両者共通するところが多く、青銅器とガラス製品は同じ工房で生産されたと考えられる（平田 2004）。

このように、第 3 段階は福岡平野南部の春日丘陵の北側低地で、大規模に青銅器やガラス製品を生産しており、弥生時代最大級の工房群を形成している。しかし、中期後半の須玖岡本遺跡D地点に継続する銅鏡など多量の副葬品をもつ墳墓は未確認である。

第4段階～西新町遺跡の成立（弥生時代終末～古墳時代初頭）

弥生時代も終わりにになると福岡平野では博多湾沿岸の集落が大規模化し、半島系土器の出土例が増えてくる。また、前代まで青銅器・ガラス製品生産の中心であった須玖岡本遺跡が衰退し、その北に位置する比恵・那珂遺跡群が成長してくる。この時期、比恵・那珂遺跡群ではいち早く庄内系土器を受容し、筑前型庄内甕を創出するなど、久住氏の表現を借りると「畿内ヤマトの飛地的展開」を示す（久住 2004）。他にも飯蛸壺や製塩土器も弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて博多湾



第 8 図 北部九州の青銅器・ガラス勾玉の鋳型出土分布図

沿岸を中心に出土する（平尾 2003・2004）。

弥生時代終末期からは西新町遺跡で集落が形成され始める。西新町遺跡では畿内系・山陰系・吉備系などの外来系土器とともに、朝鮮半島南部産の土器やその影響を受けた土器が多量に出土し、造付け竈を持つ竪穴住居跡が数多く認められることから、朝鮮半島や西日本各地を結ぶ中継地としての役割を果たした。この西新町遺跡では勾玉や小玉の土製鑄型や凝灰質泥岩の勾玉未製品、碧玉原石片が確認され、規模は不明ながら各種玉類の生産が認められる。特に小玉の鑄型は韓国全羅南道郡谷里遺跡や京畿道漢沙里遺跡出土例と類似し、鑄造技術等の導入が想定される（重藤編 2000）。なお、多量の飯蛸壺や石錘などの漁撈具の出土も特記できる。

また、博多遺跡 59・65 次調査では鉄滓が融着した断面蒲鉾状の羽口と小鉄片・粒状滓・鍛造剥片・碗形鍛冶滓が出土した（山口編 1993・小畑・佐藤 1993）。特に羽口の存在は高温操業の根拠となり、前代までの鑿切加工と砥石で研磨を施す段階から、技術が飛躍的に向上したといえる。また、断面蒲鉾形の羽口は韓国江原道安仁里遺跡に類例あり、

朝鮮半島から伝来した技術である（村上 1997）。

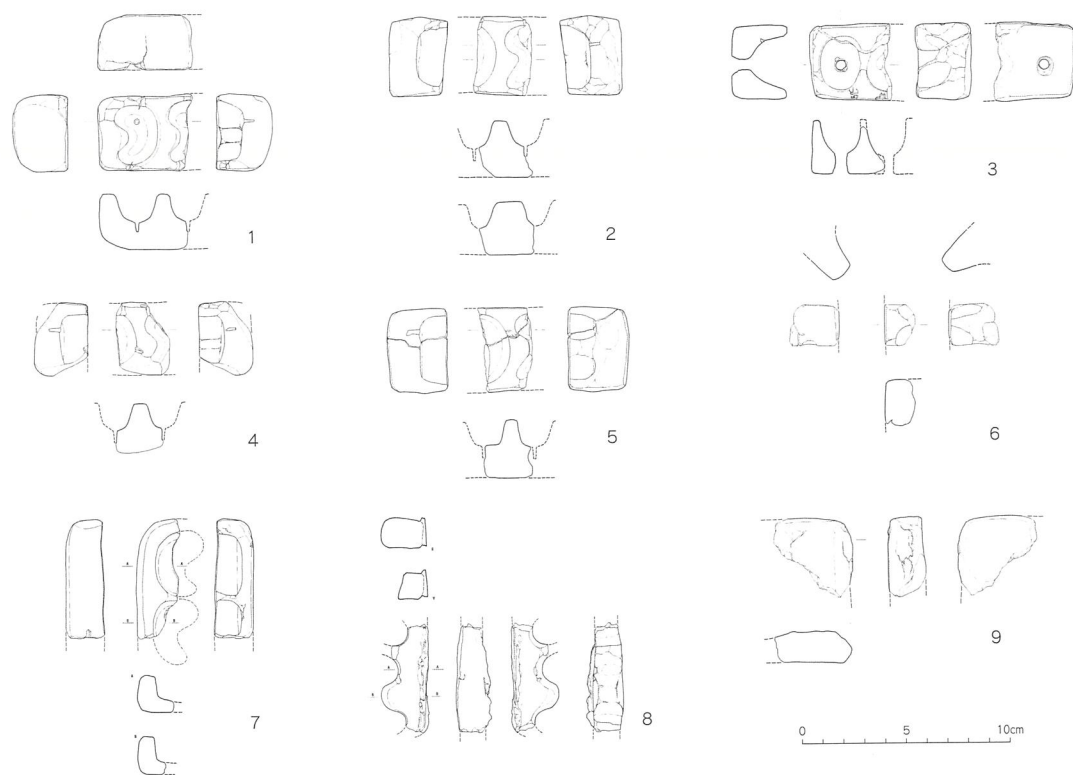
このように、第4段階は西新町遺跡の成立により、博多湾沿岸に大きな交流の拠点が確立し、朝鮮半島と西日本を結ぶ役割を果たした。そのなかで造付け竈や新しい鍛造技術などが博多湾沿岸に導入されるが、この段階では広く普及せず一過性のものであった。

Ⅲ. 考察

1. 生産遺構の立地とその変遷

上述したように、伊都国にあたる糸島地域では弥生時代前期末から古墳時代初頭にかけて生産と流通の変遷をたどることができる。それは奴国に該当する福岡平野と春日丘陵地域でも同様で、両地域では王墓とされる厚葬墓もほぼ同じ時期に出現する。それらの変遷を簡潔にまとめたものが第 11 図である。

これによると、弥生時代前期末に今山遺跡で大型蛤刃石斧の大量生産が始まることから、まず、糸島地域で分業が始まる。その後、後期に到るまで、広域に流通する製品の生産工房は認められず、大きな断絶があるといえる。後期の青銅器生産は、



第9図 須玖五反田遺跡出土ガラス製品鑄型

広形銅矛・銅戈の鋳型が拠点集落の三雲・井原遺跡で出土するが、工房跡などは未確認で、具体的な様相は明らかではない。また、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて碧玉・水晶を中心とした玉作りと土器製塩が沿岸部で認められる。

糸島地域では時代により生産するものが変化し（石斧→（不明）→青銅器→碧玉・水晶製玉類、塩）、その生産工房も変遷する特徴をもつ（今山→（不明）→三雲→潤地頭給・今山・今宿）。

一方、春日丘陵では若干遅れて分業が始まる。中期前半から石製鋳型が出土し、青銅器生産を開始するが、青銅器工房は中期末の須玖盤石遺跡が最も古く、後期に入るとガラス製品工房も確認される。両者は隣接して工房を構え、ガラス製品工房から青銅器生産関連遺物が出土することや、一つの鋳型で青銅器と勾玉を作るものがヒルハタ遺跡で認められることから同一工人が生産に携わったと想定される（平田 2004）。また、中期末から鍛冶工房も確認されるなど、春日丘陵北部と北側低地では弥生時代終末期まで一貫して生産工房が認められる。その後、比恵・那珂遺跡や博多遺跡・西新町遺跡などの博多湾沿岸部に拠点が移転する。

2. 伊都国・奴国の生産の特徴

このように両者を比較するといくつかの共通点が認められる。まず、第1に青銅器生産が拠点集落の縁辺部で行われることである（弥生時代中期～後期）。春日北部丘陵と北側低地における青銅器生産の集中は、かねてより指摘されている（平田 2004）。また、出土状況は不明だが伊都国の中心的拠点集落の三雲・井原遺跡でも鋳型が数点出土し、

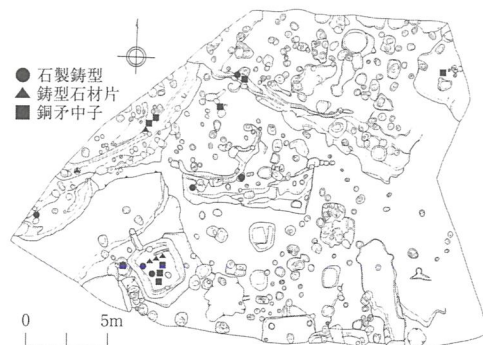
生産の規模や集中度は不鮮明だが、広形銅矛や銅戈が生産された。この特徴は北部九州だけでなく、畿内の唐古・鍵遺跡などでも認められる。

2点目の共通点は生産拠点の移動である。弥生時代中期～後期にかけて、それぞれの地域の拠点集落縁辺部で青銅器生産（ガラス生産も含む）が行われたが、弥生時代終末～古墳時代初頭にかけて生産遺跡が沿岸部に進出する傾向がみられる。糸島地域では今山遺跡（塩）・今宿遺跡（塩）・潤地頭給遺跡（玉）などで、福岡平野では博多遺跡（玉・鉄）・西新町遺跡（玉・ガラス玉）などである。もちろん、今山・今宿遺跡で見られる製塩は、原料となる海水の採取が容易なところで行うのが当然といえるが、そのほかの鉄生産などは従来、若干内陸の拠点集落で行われた。また潤地頭給遺跡や博多遺跡の玉生産の原材料となる碧玉は島根県花仙山産と考えられる。両者は花仙山周辺の玉作り遺跡での碧玉の使用開始とほぼ同時に用い込まれ（江野編 2005）、北部九州で形成されたネットワークが山陰地方まで伸びていた証拠ともいえる。

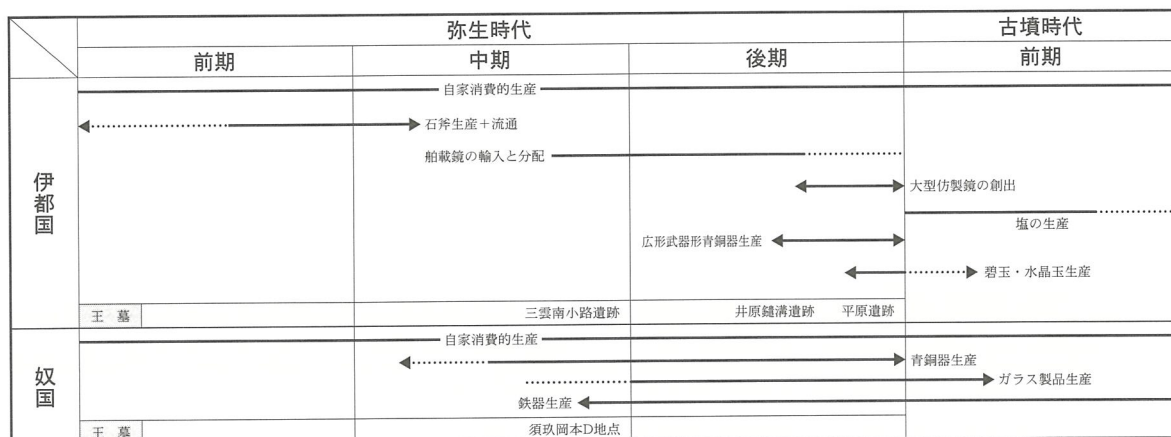
3. 潤地頭給遺跡と西新町遺跡

特に弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて沿岸部に進出する工房を伴う集落ではもうひとつの共通点が認められる。それは井戸の存在である（第12図）。

潤地頭給遺跡ではII区東側谷部付近で井戸枠が良好に残る井戸が確認された。概報によると井戸の掘り方は4.0m×3.3mの楕円形に近い形を呈する。井戸は直径60cm、深さ約2mを測り、井戸枠



第10図 須玖永田（左）・須玖盤石（右）・遺跡遺構配置図



第 11 図 伊都国・奴国手工業生産変遷図

は準構造船を転用した 6 枚の部材を組み合わせたもので、西側から圧力を受け、内部に折れ曲がった状態で確認された。井戸枠内の底部には砂利を敷き、底部近くに約 20 個体の土器が出土した。報告者は弥生時代後期後葉から終末に位置づける（江野編 2005）。なお、潤地頭給遺跡のすぐ東には雷山川が北に向かって流れ、生活用水には事欠かないことから、生活用水の確保とは別の意味を持った井戸であると考えられる。

弥生時代の井戸を分析し、その出現期には青銅器などの手工業生産との関連性が高いと指摘した堀大介氏は井戸が手工業生産に伴うのは①青銅器・ガラスなどの鑄造、②製塩、③製陶の 3 つの場合を指摘する（堀 1999a・b）。しかし、潤地頭給遺跡の井戸はいずれにも該当せず、玉作りに伴う井戸と判断できる。潤地頭給遺跡の碧玉を用いた玉作りは山陰地方との強い関連性が指摘されるが、現在のところ山陰地方では玉作りに伴う井戸は未確認である。

このことから、碧玉の加工技術や工房の形態、搬出用に加工された碧玉の原石などは、工人等の移動に伴い山陰地方から導入されたが、彼らの受け入れや工房を営む場所の選地・提供、井戸の設置などは地域を治める首長の意向に沿う形で行われ、基本的には首長により工房群全体の管理も行われたと考える。

一方、西新町遺跡には住居跡に造付け竈を伴うものが多く、半島系土器も多く出土する。また、北部九州で製作された畿内系土器や山陰系土器もみられ、多くの飯蛸壺や脚台付製塩土器も出土す

ることから武末純一氏は西新町遺跡を加耶や百済系の渡来人と畿内・山陰・北部九州系の人々が混在する国際交流港ととらえる（武末 2004）。

西新町遺跡では 3 箇所井戸が確認された（12～14 次）。その中でも遺跡の西南部の井戸は保存状態も良好であった（岡寺編 2005）。平面プランは長軸 24.0 m、短軸 14.9 m を測る南北に長い隅丸長方形を呈し、その南側に井筒にあたる井戸中央ピットを設ける。この井戸の水の状態は記載されていないが、より海に近い遺跡の北側で確認された井戸では真水と確認された（吉田編 2003）。西新町遺跡では住居跡の床面ピットの中から凝灰質泥岩の玉原石・未製品が出土したほか、ガラス勾玉・小玉の鑄型も出土している（重藤編 2001・吉田編 2003）、また、碧玉製玉未製品が 12 次・14 次調査で出土している（重藤編 2001・岡寺編 2005）。これらから、西新町遺跡の井戸が手工業生産に伴う可能性も否定できないが、遺跡の立地と住居跡の密集度、それに対する碧玉や凝灰質泥岩の出土の少なさから、生活用水確保のための井戸とするのが適当であろう。

ただ、国際交流港とされる西新町遺跡も、在地の首長の判断で渡来人を受容する場所として設定されたものとする。そのような視点にたつと、造付け竈受容の一過性なども、首長層の意向が反映された結果の可能性もある^{註 1}。

Ⅳ. おわりに一北部九州手工業生産分業体制一

以上のように、伊都国と奴国における手工業生

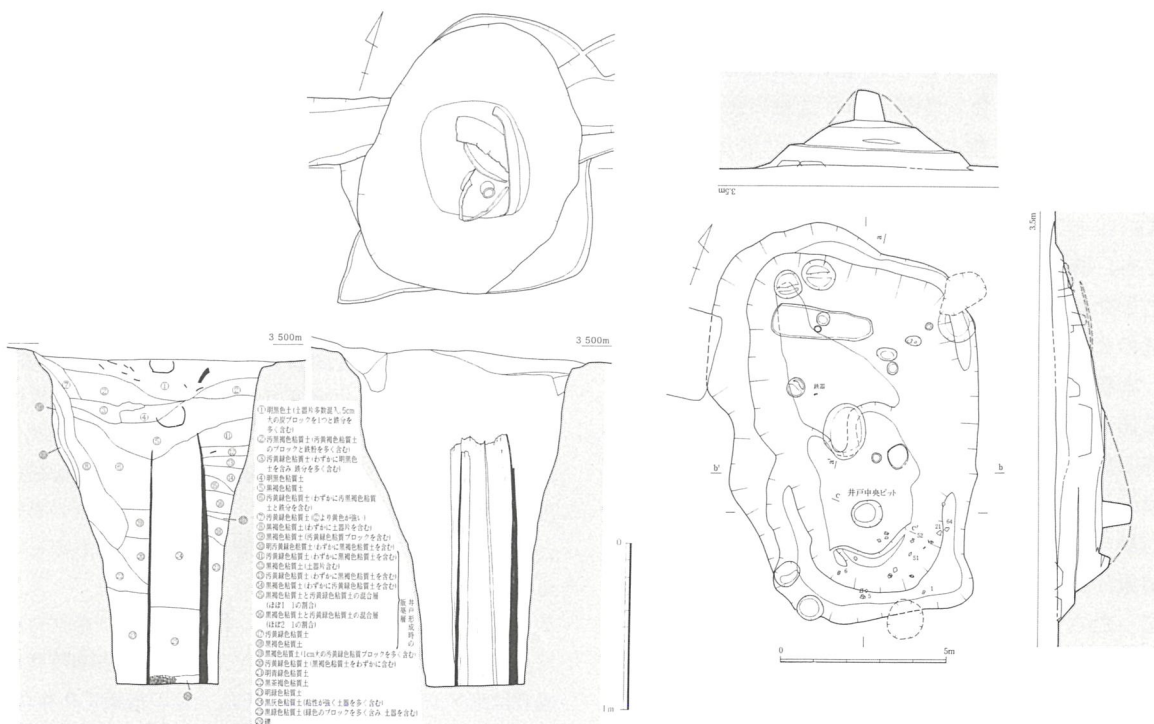
産を振り返り、共通点と相違点を抽出した。これを最近、提唱されている弥生時代～古墳時代初頭の貿易体制論と比較してまとめたい。

弥生時代の貿易体制について、白井克也氏は朝鮮半島との貿易拠点の変遷から靍島貿易（弥生時代中期前半）→原の辻貿易（中期後半～終末）→博多湾貿易（古墳時代前期）と変化することを指摘した（白井 2001）。また、久住猛雄氏は原の辻遺跡に糸島系土器が多くみられることや楽浪系土器の分布から、原の辻貿易には伊都国の王が関与していたとし、原の辻＝三雲貿易と呼ぶことを提唱した（久住 2004）。久住氏によると靍島貿易（弥生時代中期前半～中期末）→原の辻＝三雲貿易（中期末～古墳時代初頭）→前期博多湾貿易（前期前半）→後期博多湾貿易（前期中頃）→金海貿易（前期後半～末）と変遷する^{註2}。

特に弥生時代後期を中心とした時期、つまり、白井氏の原の辻貿易期、久住氏の原の辻＝三雲貿易期は、いずれも三雲・井原遺跡を中心とする伊

都国の強い影響の存在が指摘されるが、この時期の三雲・井原遺跡では、調査の限定性もあるが先述したように大規模な生産工房は確認されていない。一方、奴国では広形銅矛の生産を中心とした大規模な青銅器生産が行われ、それらの生産工房は「王直轄の官営工房」とも評されるが（境 2005 他）、弥生時代中期後半の須玖岡本遺跡 D 地点以降、王墓は確認されていない。このような状況からみると、弥生時代中期後半から後期後半の北部九州では、青銅器の生産と流通は奴国と伊都国で分担されたと考えられる。

以前、藤間生大氏は伊都国主導の共同体分業論を展開したが^{註3}（藤間 1970）、それをうけて小田富士雄氏は北部九州の国々からなる初期筑紫連合体制が形成され（小田 1987）、「外交関係は伊都国が、北部九州周辺のマツリに配布される銅矛の生産は奴国が主管する体制が確立」したと指摘する（小田 2005）^{註4}。先に述べた伊都国と奴国の青銅器生産量の違いは、このような体制下における分



第 12 図 井戸実測図（左：潤地頭給 右：西新町 14 次）

業の一環と捉えることも可能で、伊都国の流通重視の姿勢は今山遺跡の石斧生産・配布の段階からの傾向である。したがって、弥生時代中期後半～後期後半こそ北部九州での分業が確立し、連合体制もよく機能した時期と捉えられる。

また、生産と流通の分業が確立したことにより、従来指摘されていた奴国による広形銅矛の配布や鉄・青銅（銅・鉛・錫）などの入手は伊都国を介して行われた可能性が指摘できる^{註5}。このような伊都国を束ねた王は中村友博氏が想定した「貿易王」的な性格も兼ね備えた首長であると考え（中村2002）^{註6}。

しかし、このように安定していた北部九州手工業分業生産体制も弥生時代終末期になると一変する。潤地頭給遺跡の成立の頃である。

以前、潤地頭給遺跡については「伊都国の官営工房的様相が強い」と指摘したが（平尾2005）、伊都国の主導による原の辻貿易（原の辻＝三雲貿易）体制が解体し、対外交流の拠点が東の博多湾岸に移転するという社会の変動期を解明する鍵を握るのがこの遺跡といえる。したがって、この遺跡の成立・展開・終焉には大きな意味が含まれる。

つまり、北部九州や畿内などそれぞれの小地域で形成された個別の弥生社会が圧縮され、西日本全体としての社会＝倭国という意識の強化により、前方後円墳を表象とする統一的シンボルが創出された時からが古墳時代と考えることができるならば^{註7}、本来、製品のための流通であった玉類に関しても、弥生社会間の流通から倭国内の流通へと変化した結果、搬入用に加工された原石など素材段階の広域流通が可能になったものと考え^{註8}。

本稿では、弥生時代から古墳時代初頭の生産と流通の変遷を概観し、画期のひとつが潤地頭給遺跡の成立にあることを指摘した。また、弥生社会間の流通から、倭国内の流通へと変化した結果、列島内の人・モノ・情報の動きが活発化し、その結果、搬入用の碧玉原石の広域流通などが可能になったと指摘した。なお、潤地頭給遺跡の出土品は整理中で、今後、報告書が刊行されていく予定である。遺跡の具体像が明らかにされた段階で再び検討したいと考えている。

（註）

1. 反対に前方後円墳という墳墓形態の急速な広がりなどは、各地に広げようとする意向が働いた結果と考える。このほか、食習慣は保守的であるため受容されにくい可能性も指摘されている（上原2005）。

2. 本稿では久住氏の下承を得て、原の辻＝三雲貿易と表記する。

3. 藤間氏は石庖丁生産・石斧生産・銅利器生産・海運・情報・交易の6部門で行われ、北部九州の国々を結びつける役割を果たしたとするが、小田富士雄氏が指摘するように各部門が盛行した時期に差があり、若干の修正が必要である（小田1987）

4. 小田氏は初期筑紫連合体制について述べる中で、連合体制を主導する国を頭につけて奴国連合体制や伊都国連合体制と述べている（小田1987）。従来は王墓とされる厚葬墓が継続して築かれる伊都国が北部九州の中で優位であったとされるが（弥生時代後期）、本稿では生産と流通を分担した結果、連合体制が維持されたとして論をすすめる。しかし、本来は連合体制といえども主導するグループと従属するグループの存在は明らかで、それらの抽出は今後の課題とする。

5. ここで指摘した伊都国の広形銅矛の配布先は主に杵岐・対馬・朝鮮半島という北側方面と考える。東九州や四国は従来どおり奴国による配布が行われたのだろう。なお、これらのことから原の辻貿易（原の辻＝三雲貿易）は伊都国主導といえども、東九州や四国方面には奴国の流通網も整えられていたとする指摘に従う（下條1991）。また、鉄や青銅（銅・鉛・錫）の入手経路について詳細は不明で、伊都国を経由したとするのもひとつの可能性を指摘したものである。

6. 中村氏は「北部九州の弥生時代の王は隊長ないしその組織者である」と指摘するが、「南北市糴」した対馬の広形銅矛などを副葬する石棺墓（塔の首遺跡等）の被葬者が該当すると考える。基本的に伊都国や奴国の王墓とされる墓は各地域で最も広い平野部に形成された拠点集落の中に築かれ、副葬品以外でも一般構成員との隔絶性が認められることから、貿易王そのものとはいえないが、貿易王的要素を多分に含むものと考ええる。

7. この古墳時代の定義はR. ロバートソンのグローバリゼーション論を参考にした。しかし、古墳時代の成立は東アジア世界（これもまた一つの地域であるが）から見れば、小地域の成立ともいえ、グローバリゼーションの語義やその成立過程からも分かるように古墳時代の成立をそのままこの概念に当てはめること

はできず、検討が必要であろう。

また、本稿では提示していないが、弥生社会が圧縮する原因の検討も必要である。例えば、白石太一郎氏は原因の一つに「広域の政治連合形成の背景に、朝鮮半島との交易ルートの支配権をめぐる抗争」の存在を指摘する（白石2002）。

8. 玉類のほかにも、北部九州への脚台付製塩土器、畿内への鉄器の広がりも倭国内の流通の確立に伴うものと考ええる。

【参考文献】

- 上原真人 2005 「暮らしぶり」『暮らしと生業』列島の日本史2 岩波書店
- 江野道和編 2005 『潤地頭給遺跡』前原市文化財調査報告書第89集
- 岡寺未幾編 2005 『西新町遺跡Ⅵ』福岡県文化財調査報告書第200集
- 岡部裕俊編 1989 『長野宮ノ前遺跡』前原市文化財調査報告書第31集
- 岡部裕俊編 1998 『王がいた証』伊都歴史資料館
- 岡部裕俊・牟田華代子編 2002 『三雲・井原遺跡Ⅱ』前原市文化財調査報告書第78集
- 岡村秀典 1984 「前漢鏡の編年と様式」『史林』67-5
- 岡村秀典 1993 「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』55
- 小田富士雄 1987 「初期筑紫王権形成史論—中国史書にみえる北部九州の国々—」『東アジアの考古と歴史』中 同朋舎
- 小田富士雄 2005 『『魏志』倭人伝のクニグニ』別冊太陽』136 平凡社
- 小畑弘己・佐藤一郎編 1993 『博多37』福岡市埋蔵文化財調査報告書第329集
- 春日市教育委員会編 1994 『奴国の首都 須玖岡本遺跡』吉川弘文館
- 片岡宏二 1996 「渡来人と青銅器生産」『古代』102
- 河合修編 1999 『久米遺跡』志摩町文化財調査報告書第21集
- 河野一隆 2006 「水晶製玉類の生産と流通」『季刊考古学』94 弥生・古墳時代の玉文化
- 久住猛雄・池田祐司編 2000 『JR 筑肥線複線化地内遺跡埋蔵文化財調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第654集
- 久住猛雄 1999a 「北部九州における庄内並行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIX
- 久住猛雄 1999b 「弥生時代終末期「道路」の検出」『九州考古学』74
- 久住猛雄 2000 「奴国の遺跡—比恵・那珂遺跡群と須玖・岡本遺跡群」『考古学から見た弁・辰韓と倭』
- 久住猛雄 2002 「九州における前期古墳の成立」『日本考古学協会 2002 年度榎原大会研究発表資料集』
- 久住猛雄 2004 「古墳時代初頭前後の博多湾岸遺跡群の歴史的意義」『大和王権と渡来人』大阪府立弥生文化博物館
- 後藤直 1987 「朝鮮系無文土器再論」『東アジアの考古と歴史』中 同朋舎
- 境靖紀編 2004 『仁王手遺跡』春日市文化財調査報告書第37集
- 境靖紀 2005 「奴国」『別冊太陽』136 平凡社
- 重藤輝行編 2000 『西新町遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第154集
- 重藤輝行 2001 「第5章 考察」『西新町遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第157集
- 下條信行 1975 「北九州における弥生時代の石器生産」『考古学研究』22-1
- 下條信行 1991 「北部九州弥生中期の「国」家間構造と立岩遺跡」『古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念論集
- 白井克也 2001 「靑島貿易と原ノ辻貿易」『弥生時代の交易』第49回埋蔵文化財研究集会
- 白石太一郎 2002 「倭国誕生」『倭国誕生』日本の時代史1 吉川弘文館
- 高久健二 1993 「楽浪墳墓の編年」『考古学雑誌』78-4
- 武末純一 1993 「交易はどのように行われたか」『新視点日本の歴史』第1巻原始編 新人物往来社
- 武末純一 2004 「伽耶と倭の交流—古墳時代前・中期の土器と集落—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集
- 寺沢薫 2000 『王権誕生』日本の歴史02 講談社
- 藤間生大 1970 『埋もれた金印—日本国家の成立—第二版』岩波新書
- 中村友博 2002 「石器から金属器へ—ヨーロッパとの比較—」『古代を考える 稲・金属・戦争』吉川弘文館
- 長家伸 2002 「弥生時代の鍛冶技術について」『細形銅剣文化の諸問題』
- 中山平次郎 1931 「今山の石斧製造所址」『福岡県史跡名勝天然記念物調査報告』第6輯
- 二宮忠司編 1992 『福岡市博多区国史跡板付遺跡環境整備報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第314集

橋口達也編 1984『石崎曲り田遺跡Ⅱ』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第9集

橋口達也編 1985『石崎曲り田遺跡Ⅲ』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集

橋口達也編 1994『曲り田周辺遺跡Ⅳ』二丈町文化財調査報告書第7集

橋口達也編 1995『大坪遺跡Ⅰ』二丈町文化財調査報告書第10集

原田大六 1952「福岡県石ヶ崎の支石墓を含む原始墓地」『考古学雑誌』38-4

平尾和久 2003「福岡県における飯蛸壺形土器の受容と展開—西新町遺跡を中心に—」『古文化談叢』50(上)

平尾和久 2004「北部九州の脚台付製塩土器」『福岡大学考古学論集—小田富士雄先生退職記念—』

平尾和久 2005「伊都国」『別冊太陽』136 平凡社

平田定幸編 2001『須玖盤石遺跡』春日市文化財調査報告書第29集

平田定幸 2004「青銅器とガラス製品の生産—九州」『考古資料大観』10 遺跡・遺構 小学館

広瀬和雄 1997『縄文から弥生への新歴史像』角川書店

堀大介 1999a「井戸の成立とその背景」『古代学研究』146

堀大介 1999b「手工業生産にともなう井戸について」『考古学に学ぶ』

丸山康晴編 1980『赤井手遺跡』春日市文化財調査報告書第6集

丸山康晴編 1987『須玖永田遺跡』春日市文化財調査報告書第18集

村上恭通 1997「原三国・三国時代における鉄技術の研究—日韓技術比較の前提として—」『青丘学術論集』11

村上恭通 1998『倭人と鉄の考古学』青木書店

柳田康雄 1983「糸島地方の弥生遺物拾遺」『九州考古学』58

柳田康雄編 1985『三雲遺跡 南小路地区編』福岡県文化財調査報告書第69集

柳田康雄 2002『九州弥生文化の研究』学生社

柳田康雄・角浩行編 2000『平原遺跡』前原市文化財調査報告書第70集

山口譲治編 1993『博多36』福岡市埋蔵文化財調査報告書第328集

山崎純男 1994「福岡県」『日本製塩土器研究』青木書店

吉田東明編 2003『西新町遺跡Ⅴ』福岡県文化財調

査報告書第178集

吉田佳広編 1994『須玖五反田遺跡』春日市文化財調査報告書第22集

吉田佳広編 1995『須玖五反田遺跡Ⅱ』春日市文化財調査報告書第24集

吉留秀敏 2004「集落・居館・都市的遺跡と生活用具—九州」『考古資料大観』10 遺跡・遺構 小学館

米倉秀紀編 2005『今山遺跡8次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第835集

R.ロバートソン(阿部美哉訳) 1997『グローバリゼーション』東京大学出版会

図の出典

第3図 岡部編1998、河合編1999を改変

第4図 柳田・角編2000を改変

第6図 米倉編2005、久住・池田編1999を改変

第7図 二宮編1992を改変

第8・10図 平田2004を改変

第9図 吉田編1995を改変

第12図 江野編2004、岡寺編2005を改変